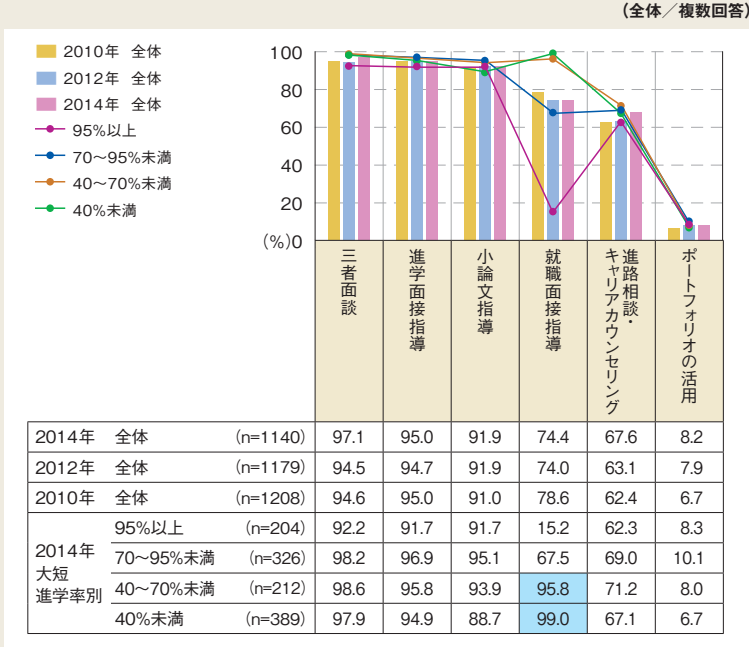


担任の個別指導を継続的にサポートするための“進路カルテ”

生徒の希望進路や学習状況、成績など、進路に関する情報を管理・共有する“進路カルテ”。担任による指導格差を減少させ、3年間を通して継続的に生徒理解を図るためのツールとして学校全体で活用し個別指導に役立てている事例をご紹介します

取材・文／永井ミカ

図1 現在実施している進路指導の取り組み<抜粋>



※「2014年 全体」より5ポイント以上高い数値を■色で表示

※小社「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」より
(調査時期：2014年10月 調査対象：全国の全日制高校の進路指導主事)

三者面談を中心に 実施率の高い個別指導

小社「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」によると、個別指導に関する取り組みは全体的に実施率が高いことがわかっている(左図参照)。なかでも三者面談はほぼすべての高校で実施。そのほか、進学面接指導、小論文指導、また進路多様校での就職面接指導が実施率90%を超えている。進路相談・キャリアアカウンセンシングはやや低いものの、そ

れでもおよそ68%の高校で行われ、実施率は増加傾向にある。これら個別指導は、多くの学校では担任がメインとなっており、生徒が落ち着いて進路実現を図るために大切だからだ。しかし、完全に担任に任せきりとしていたのでは、生徒・保護者にとつては「担任によって指導内容や指導力に格差がある」「担任が替わったことで指導内容が変わる」「担任が言っていることと進路担当教員が言っているこ

とが違う」といった問題が、教員にとつては「個々の生徒の進路指導について過去の経緯が不明」「経験不足などにより個別指導に自信がもてない」といった問題が生じてくる。

進路カルテを運用して 学校全体で進路指導

そこで、進路指導の方針を学校として明確にし、個別指導に対しても進路指導部がリーダーシップをとることが求められる。生徒と直接対峙するのは担任だとしても、進路指導部として担える部分もある。

その中の一つが、今回事例で紹介する「3年間を通じた生徒のデータの管理」だ。事例1では生徒の将来の夢や短期的な目標など、事例2では生徒の模試の成績や志望校などをデータとして積み重ね、担任、学年、進路指導部、その他の分掌など学校全体で共有。必要に応じて活用している。2つの事例の、進路カルテに共通するのは、いずれも生徒1人の情報をA4用紙1枚にまとめ、担任に大きな負担をかけることなくシンプルに運用していること。また導入や運用にあたって大がかりな予算や特別なスキルが必要ないことが、担当者が替わったとしてもシステムを継続していきける力ギとなっている。

A4用紙1枚にシンプルにまとめた「夢カルテ」で 担任が替わっても継続的に生徒の自己実現をバックアップ

浜松開誠館中学校・高校（静岡県・私立）

1996年より独自のキャリア教育や「コミュニケーション」能力育成に力を注ぎ、98年、女子校から共学となった浜松開誠館中学・高校。現在は徳育教育において自己実現を図るための能力を育成することに注力し、5年前に立ち上げた徳育推進課を中心にさまざまな取り組みを実施している。

生徒と教員の両者が記入し 両者がそれぞれ保管・活用

「私たちはこれまでずっと、『どのようにして進路意識の向上を図るか』を課題としてきました。そこで多くの生徒に失敗を恐れず挑戦してほしいと思い、『夢力（可能性を信じる力）』や『人間力』を育てるためのプログラムを実践することにしたのです。その結果、進路実績は徐々に上がり東京大学をはじめとする難関大合格者やJリーガーを輩出するようになりました」と、徳育推進課長の櫻田慎先生。具体的には、中学校では徳育教育のオリジナルプログラムの『K-コンパス®』、

高校ではリーダーシップ開発講座「7つの習慣J®」を徳育の主な取り組みとし、「自分自身で考え、発言や行動ができる習慣」を身につけることを重視している。

それと同時に、生徒は日々の学校生活の中で振り返りノートをつけている。目標管理、時間管理をしながら、ステップアップのための振り返りの力を高めていこうというノートで、担任とのコミュニケーションツールともなっている。さらに、担任だけでなくもともと多くの大人がさまざまな視点から6年間（または3年間）継続的に生徒を見守り、夢を応援していくことができなにかと考えて誕生したのが「夢カルテ」だ。

「夢カルテ」の作成にあたっていくつかの学校を視察した結果、まずはアナログでシンプルなもの浸透しやすいと考え、A4用紙1枚のカルテを導入した。春休み、夏休み、冬休み明けの面談ごとに1枚を使い、生徒は面談前に将来の夢や短期目標、それに対して今取り組んでいる

ことや取り組むべきことを自ら考え、書いて担任に提出。面談時、担任はカルテの内容について話をし、アドバイスを記入する。両者が記入したカルテはコピーをとり、1部は生徒がポートフォリオで管理し、1部は教員が職員室でファイリング保管。担任以外の教員も見ることが出来る。

「全学年で実施しているので、クラス替え時は、それまでに蓄積された生徒のカルテが次の担任に引き継がれます。前回の面談時と夢や目標が変わってあれば『どうして変わったの？』と話すきっかけになり、これまでの経緯は生徒理解に役

徳育推進課 課長
櫻田 慎先生



School Data

1924年創立／普通科／生徒数(高校)873人(男子512人・女子361人)／進路状況(2014年度実績) 大学129人・短大10人・専門学校61人・就職39人・その他17人

夢カルテ (高校生用)

ダウンロード可

夢カルテの保管



生徒1人分を1枚のクリアシートにストック。1クラス分をファイルボックスにまとめて職員室で保管。担任以外の教員も閲覧できる。

立ちます」と櫻田先生。また生徒も、必ず書くように指導されることで改めて将来について考える機会となる。そして書いたからにはそれが明確な目標となり、新しい気持ちで新学期を始められるメリツトがあるという。今後の課題として櫻田先生は「部活や教科の担当者など、担任以外にもっと活用できる運用体制にしていきたい」そうだ。

成績や家庭学習状況など生徒の情報を一元化 進路検討会で共有し一人ひとりの進路を考える

下関西高校（山口・県立）

下関西高校は毎年100人を超える国公立大学現役合格者を輩出する県内有数の進学校。しかし、10年以上前は、学年やクラスによって進路指導にバラつきがあるという意見も少なくなかった。そこで、2005年度より、学年主導の進路指導を校内で統一し、組織的な進路指導体制に変換し、指導の標準化を徹底。現在も取り組みは続いている。

進路指導を標準化するため 毎学期、進路検討会を開催

同校では原則、面談（二者）→進路検討会→三者懇談という流れを毎学期くり返す。進路検討会とは学年別に開かれる会議で、各担任、校長、教頭、進路部長は必ず出席。教科担当者や新任の先生にもなるべく出席してもらう。「指導の標準化にあたって、私たちが最も大切にしているのが情報の共有です。生徒のデータや進路に関するデータ、教員のスキルやアイデアを共有し、学校全体の財産としています。そして情報を共有するため

の場所が進路検討会です」と言うのは、進路指導部部長の大塚睦之先生。進路検討会では、各担任が生徒の情報を持ち寄り、その場にいる全員で一人ひとりへの進路指導の方向を考えていく。3年生は毎学期全員の生徒、1・2年生は2学期のみ全員、1・3学期は担任が選んだ生徒が対象となる。

このとき、その場にいる全員が資料として持っているのが、各生徒の情報をA4用紙1枚にまとめたもの。面談用に調査した進路希望や家庭学習時間、通塾状況のほか、これまでの外部模試の結果や中間・期末の成績、現在どのように指導して、どのような課題があるかなどが記載されている。外部模試のデータを取込み、進路指導部員が成績などの最新データを打ち込めば、反映されたものが印刷されるようになっていく。前任の進路指導部長が、指導の標準化を徹底するために市販のデータベースソフトを使って始めた方法で、大塚先生はその志とともにシステムを引き継いだ。

検討会の効果は大きい。まず、担任は

生徒一人ひとりについて会議でどのようにコメントするか考えるため、生徒理解が深まる。そして、成績は悪くないのにモチベーションが上がらない生徒、もつと志望校を上げることができそうな生徒、授業についていくのが厳しくなってきた生徒など、さまざまな生徒について話し合われる場合は、特に経験の少ない若い先生にとつては貴重である。また、新任の先生にも同校の進路指導の方針を事例を通して伝えることができる。そして共有した指導の方針について、続く三者懇談で

「学校の方針」として明確に保護者に伝えることもできるため、保護者の信頼も得やすい。もちろん、生徒にも自信をもって指導ができる。

「今後もこのシステムが形骸化しないよう運営していきたい」と大塚先生。一人ひとりの生徒を学校として指導することで、生徒の向上心をアップさせ進路実現を図っていききたい考えだ。

進路指導部 部長
大塚睦之先生



School Data

1920年創立／普通科・理数科／生徒数709人(男子404人・女子305人)／大学合格者数(2014年度実績) 大学378人・中学校2人・短大2人・専門学校3人

進路検討会議資料

ダウンロード可

こちらは2年生の12月の会議のもの。模擬試験成績推移表、通知票、指導の記録（現在の最重要課題、問題解決のための具体的対策、当面の目標設定）、学習時間・塾、志望大学推移が記入されている。検討会議の資料としてだけでなく、三者懇談で保護者に示したり、部活動の顧問にも見せる。保護者とも信頼関係を築きながら、学校全体で生徒一人ひとりをていねいにみていくための生徒データだ。